

Nara Women's University Digital Information Repository

Title	奈良皇室博物館正倉院掛・大宮武麿氏寄贈図書展：第十五回図書展示
Author(s)	奈良女子大学附属図書館
Citation	奈良女子大学附属図書館：奈良皇室博物館正倉院掛・大宮武麿氏寄贈図書展：第十五回図書展示，2002
Issue Date	2002-10
Description	奈良女子大学附属図書館第十五回（平成14年10月～平成15年10月開催：文学部、附属図書館共催）図書展示『奈良皇室博物館正倉院掛・大宮武麿氏寄贈図書展』の資料
URL	http://hdl.handle.net/10935/2609
Textversion	publisher

This document is downloaded at: 2018-12-16T23:02:05Z

第十五回 図書展示

平成十四年十月

『奈良帝室博物館正倉院掛・大宮武麿氏寄贈図書展』

奈良女子大学附属図書館は、一九九九年八月、大学に程近い奈良市北半田東町在住の大宮義雄・晴子御夫妻から、晴子氏の義父に当たる大宮武麿氏旧蔵の図書の寄贈を受けた。

大宮武麿氏は一八七〇年（明治三年）、氷室神社社掌も勤めた守麿を父として、奈良高畑町に生まれ、一八九六年（明治二九年）より漢国神社社掌。一九〇八年（明治四十一年）からは奈良帝室博物館（今の奈良国立博物館）に技手として勤務、正倉院掛を兼ねた。以後、没年の一九四五年（昭和二〇年）まで博物館に勤める。享年、七十五歳。すなわち、明治から昭和にかけて、奈良に生まれ神職に就き博物館員を務めた大宮武麿氏は、奈良の古代以来の歴史と文化の伝統を、身を以て受け継いだ人であった。とするならば、その人の遺した蔵書は、奈良の歴史と文化の伝統を、同じ奈良に学ぶ我々に伝えてくれるものと言えよう。

寄贈された蔵書点数は計 一三二一点。今回は、その中から十数点を選び、

I 稀覯本

（蔵書の中で学術的にも特に貴重と思われる写本三点）

II 奈良帝室博物館正倉院掛として

（博物館や正倉院所蔵資料の大宮氏による手写本など、博物館・正倉院ゆかりの書物。
ならびに大宮氏の勉学の跡を物語る自筆のノートなど）

III 学者・文人との交友

（博物館所蔵・寄託資料を研究する学者との交流と研究への協力、および明治・大正期の著名な漢学者、土屋鳳洲との交流を示すもの）
の三部構成にして展示した。

I 稀覯本

1 寂恵法師歌語 写本 一冊

十三世紀から十四世紀にかけての歌僧・寂恵は俗名は安倍氏、宗尊親王の近習として鎌倉歌壇において活躍。その後京都に戻り、出家して順教房寂恵と名乗り、藤原為家の教えを受ける。本書は、晩年の正和三年（一一三二）に、初めて為家のもとを訪れた日のことを回想し、為家の和歌十首を選び評したものである。これまで水戸彰考館に元禄期の転写本が唯一知られるのみであったが、本書は彰考館本を遡ること約五十年の寛永二十年（一六四三）中院通村筆の最善本。

2 自讃歌注 写本 一冊

後鳥羽院が、定家・家隆・慈円ら十六人に自讃の歌十首を選ばせたとされるが、実際は鎌倉中期の成立かと推定されている私撰集の「自讃歌」に注釈を施したものである。南北朝の歌人・頼阿の注とされるもの以来、多くの注釈書が作られた。本書は奥書に「右、宗祇より兼載へ相伝の注なり」とあるが、既に知られている「宗祇注」とも「兼載注」とも異なる注。奥書に「慶安五暮春中旬書也」とあるように、江戸時代初期の写本。

3 羈旅雜記 写本 一冊

幕末の歌人・勤皇の志士、伴林光平の天保十一年（一八四〇）三月から天保十三年五月ごろまでの旅中のメモ。光平自筆。光平は河内出身。因幡の飯田秀雄、紀州の加納諸平、江戸の海野遊斎・伴信友らに学んだ。本書は、自らの和歌のほか、行程の覚書・師の歌論の聞書・賀茂真淵、香川景樹ら歌人の評判・荻生徂徠の著作の抜書など内容多岐に渡る。光平は後に天誅組に参加し、文久四年（一八六四）京都で刑死。

II 奈良帝室博物館正倉院掛として

4 東大寺正倉院御封之掛様并印鑰之図 写本 一帖

関白鷹司輔平（文化十年（一一八二）没、七十五歳）に求められて東大寺北林院法印成範が転写した、正倉院南倉の錠と鍵（印鑰）の絵図の写しである。輔平の本意は、錠に掛けられた勅封の図にあったが、秘図中の秘図のため、代わってこの図が献上されたという。

5 東大寺墾田地図 写本 一冊

大宮氏による正倉院御物「東大寺墾田地図」の臨模である。原絵図は、神護景雲元（七六七）年の東大寺寺領検注のため描かれた越中国の寺領絵図。この年は班田の年で、東大寺は寺領確認のため大規模な検注を行う必要があった。

6 雑記 写本 一冊

歴史・文学・語学の諸事項について和漢の古典籍からの抜書きを中心に纏めた、大宮氏のノート。中でも、阿蘇神社に関する抜書きは、一部『古事類苑』からの引用も見え、詳細を究める。

III 学者・文人との交友

《大矢透との交友》 写本 一冊

7 成実論天長点

国語学者、大矢透の著作『仮名遣及仮名字体沿革史料』の一編。『沿革史料』所収「地藏十輪経元慶点」では、大宮氏が浄書にあたっていたが、本書では氏の事務多忙によりそれが叶わなかったと本書跋文に見える。著者から大宮氏に献呈された一冊。

8 野山のなげき 写本 一冊

伴林光平の歌集。ライフワークであった陵墓調査の折々に詠じた和歌を収める。奥書に、大正十一（一九二二）年大矢透蔵本を大宮氏が書写した由が記されており、館員と利用者という事務上のつきあいを越えた交友が偲ばれる。この時期、大矢は奈良に在住していた。

《春日政治との交友》

9 西大寺本金光明最勝王経の国語学的研究（参考出陳）

春日政治は、もと奈良女子高等師範学校教授で、後に九州帝国大学教授に転じた国語学者。春日は、大矢透の依嘱を受け、奈良帝室博物館に寄託されていたこの経巻を、大正十三年から昭和八年まで、九年の年月をかけて調査した。本書緒言には、博物館員大宮氏への謝辞が記されている。

明の丘@018524 (広東省瓊山県) に仮託した類書の和刻本の写しである。もと春日政治の蔵書であったが、それを大宮氏が、今も奈良女子大の近く東向北商店街にある豊住書店で見付け購ったことが奥書から知られる。本文中の貼り紙は、大宮氏による補正である。

※@018524 = 「ヰ」 + 「睿」の大漢和番号

《土屋鳳洲との交友》

11 晩晴楼詩鈔 (下巻)

版本 一冊

明治の漢学者、土屋弘(鳳洲)の漢詩集。豊かな学殖と文才が遺憾なく發揮された集中の詩は、六朝詩、初唐詩とさまざまな詩風を見せる。この書が刊行された明治十九(一八八六)年より、土屋は吉野師範校長を務めた。

12 土屋弘より大宮武麿宛はがき 一枚 大正元(一九一二)年八月十一日付

岩代国飯坂(現・会津若松市)旅宿より、大宮氏に宛てた絵葉書。文中には、名崎氏の件で大宮氏が迅速に事を運んでくれたことへの礼と、ラジウム温泉に浴し体調が回復した旨が記されている。土屋はこの時七十二才。

以上

共催 文学部

附属図書館

協力 人間文化研究科 大谷 俊太

長谷川 千秋